

司式:大谷 昌恵
奏楽:山田 絵里

前奏:「装いせよ、愛する魂よ」(G.メルケル)

招詞:14 娘シオンよ、声をあげて喜べ。わたしは来て、あなたのただ中に住まう、と主は言われる。17 すべて肉なる者よ、主の御前に黙せ。主はその聖なる住まいから立ち上げられる。(ゼカ2:14、17)

讃美歌:4「世にあるかぎりの」

罪の告白・赦し

聖霊を求める祈り

朗読聖書①サムエル記上 18:5-6

◆ダビデに対するサウルの敵意(一部)

- 05 ダビデは、サウルが派遣するたびに出陣して勝利を収めた。サウルは彼を戦士の長に任命した。このことは、すべての兵士にも、サウルの家臣にも喜ばれた。
- 06 皆が戻り、あのペリシテ人を討ったダビデも帰って来ると、イスラエルのあらゆる町から女たちが出て来て、太鼓を打ち、喜びの声をあげ、三絃琴を奏で、歌い踊りながらサウル王を迎えた。
- 07 女たちは楽を奏し、歌い交わした。「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った。」
- 08 サウルはこれを聞いて激怒し、悔しがって言った。「ダビデには万、わたしには千。あとは、王位を与えるだけか。」
- 09 この日以来、サウルはダビデをねたみの目で見えるようになった。
- 10 次の日、神からの悪霊が激しくサウルに降り、家の中で彼をものに取りつかれた状態に陥れた。ダビデは傍らでいつものように堅琴を奏でていた。サウルは、槍を手にしていたが、11 ダビデを壁に突き刺そうとして、その槍を振りかざした。ダビデは二度とも、身をかわした。
- 12 主はダビデと共におられ、サウルを離れ去られたので、サウルはダビデを恐れ、13 ダビデを遠ざけ、千人隊長に任命した。ダビデは兵士の先頭に立って出陣し、また帰還した。
- 14 主は彼と共におられ、彼はどの戦いにおいても勝利を収めた。
- 15 サウルは、ダビデが勝利を収めるのを見て、彼を恐れた。
- 16 イスラエルもユダも、すべての人がダビデを愛した。彼が出陣するにも帰還するにも彼らの先頭に立ったからである。

朗読聖書②マタイによる福音書 8:28-34

◆悪霊に取りつかれたガダラの人をいやす

- 28 イエスが向こう岸のガダラ人の地方に着かれると、悪霊に取りつかれた者が二人、墓場から出てイエスのところにやって来た。二人は非常に狂暴で、だれもその辺りの道を通れないほどであった。
- 29 突然、彼らは叫んだ。「神の子、かまわないでくれ。まだ、その時ではないのにここに来て、我々を苦しめるのか。」
- 30 はるかかなたで多くの豚の群れがえさをあさっていた。
- 31 そこで、悪霊どもはイエスに、「我々を追い出すのなら、あの豚の中にやってくれ」と願った。
- 32 イエスが、「行け」と言われると、悪霊どもは二人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れはみな崖を下って湖になだれ込み、水の中で死んだ。
- 33 豚飼いは逃げ出し、町に行き、悪霊に取りつかれた者のことなど一切を知らせた。
- 34 すると、町中の者がイエスに会おうとしてやって来た。そして、イエスを見ると、その地方から出て行ってもらいたいと言った。

聖なる主なる神さま、聖名を崇め賛美致します。主の年2026年も、早や一ヶ月が過ぎ、2月最初の日を「主の日」として迎えることができました。寒さが最も厳しい時ではありますが、健康を与えられ、あなたは今日も、私たち一人ひとりに声をかけてくださり、この礼拝堂で、あるいはライブ配信で、礼拝をお献げするようにと招いてくださいましたこと、心より感謝致します。あなたに招かれて御前に集った私たちが、心からの賛美と祈りをお献げし、あなたから与えられる御言葉に養われ力を与えられて、この場所から押し出され、ここからの新しい日々の歩みを始めることができますよう、この礼拝を最初から最後までお守りください。

主なる神さま、私たち信濃町教会は新しい年度に向けての準備を、今、整えています。今月、定期教会総会を開くために、改めて教会の今年度の歩みを振り返りつつ新年度の計画を考えております。今教会の歩みは決して順調とは言えません。財政的にも厳しい状況に置かれ、それでもなお、私たちはあなたから託されたこの信濃町の地での福音宣教の業を推し進めていくために、何をすればよいのか、何ができるのかを考えています。あなたの肢である教会が御心に適った働きができるように、どうぞ私たちに必要な知恵と力をお与えください。そして、これから先も豊に福音を宣べ伝え、御国の到来を待ち望む群れとしてあなたに喜んで頂ける働きができるようお導きください。

神さま、この礼拝において御言葉を取次ぐ牧者を与えられたことを感謝致します。今日、私たちのために御言葉を語ってくださいます佃 雅之牧師を聖霊で豊かに充たし、佃牧師が大胆に豊に御言葉を語ることができまうように聖霊を豊かにお注ぎください。そして聞く私たちの心も整えてくださいますようお願い致します。

今日、日本中、世界中の教会で献げられる礼拝を覚えて祈ります。特に、大雪が降っている地方の教会では、信徒を迎える教師も、また、教会へと向かう信徒も、様々な困難があることでしょう。そのような中であって、献げられる礼拝を特に豊かに祝してください。

寒さの中で体調を崩している方や高齢のために礼拝に集いたくても集い得ない方が多くおられます。そのような方たちの痛みや辛さを、あなたが受け止めてくださいますようにと祈ります。いずれまた、共に御前に礼拝をお献げできる時までの夫々の歩みもお守りください。

この感謝と願いの祈り、教会の頭である私たちの主、イエス・キリストの聖名を通して、御前にお献げを致します。アーメン。

讃美歌:440「備えて祈れ」

説教 「神から人を遠ざける力」

佃 雅之

キリストは弟子たちを伴い福音を宣べ伝えるために、ガリラヤ湖の「向こう岸」にある異邦人の町ガダラへ向かわれました。するとその時、「悪霊に取りつかれた者が二人、墓場から出てイエスのところにやって来た。」と聖書は語ります。聖書には、悪霊、悪魔、サタンが何度も登場します。「悪魔」と呼ばれる者たちは悪霊たちを支配し、神から人を引き離す存在です。この二人が「墓場」に居たということは、「生きた人との交わりを失い、孤独の中に置かれていた」ということです。それは自分から選りつた孤独というより、生きている中で行き場を失い辿り着いてしまった場所であったのかも知れません。

人々から忌み嫌われ、穢れた者、呪われた者として退けられ、社会の外へと押し出されてしまっていた。すべてを恨み、そして自分自身に対してさえ激しい怒りを抱えていたのでしょう。その怒りは行き場を失い、周囲の人々へと当たり散らされていました。私たちが時に、まるで“悪霊に取りつかれ”ているかのように、自分を傷つけ、また、他者をも傷つけてしまう人間の姿を目にすることがあります。何気ない言葉や売り買い、無関心によって、私たちは人を孤独へと追いやってしまうことがあります。その結果、人を生きた交わりの場から引き離し、まるで「墓場」のような場所へと追いやってしまうことさえあります。

この現実、社会だけでなく教会の中でも起こり得ることです。それは特定の誰かの問題ではなく、私たちの日常の中で起こっていることなのです。今の時代を生きる私たちは、誰もが加害者にもなり、また、被害者にもなりえる時代を生きています。人と人との関係を壊し、言葉を通じなくさせ、孤立と分断を生み出す力は以前にも増して強く感じられることさえあります。日頃、私たちの耳には悪魔の囁きが入り込み、神の言葉に耳を傾けることが後回しになりがちです。それは、神が今も生きておられ、私たちのすべてを見ておられ、すべてをご存知であるということをお忘れしている姿ではないでしょうか。私たちは日々の生活の中で、人を神から、また人を人から引き離してしまう力の影響を受けています。私たちは皆、神の前にあって、弱さと罪を抱えた存在であることを改めて知らされています。

この「墓場から出て」きた「二人」は不安と恐れの中で生きていました。すると、「突然」、「悪霊」が叫びます。「神の子、かまわないでくれ。」この言葉もまた、私たちの日常の中にあることです。私たちが時に、“主よ、今はこのまでにさせてください。今はこれ以上近づかないでください。”と心の扉をそっと閉めてしまうことがあるのではないのでしょうか。御言葉が自分の痛みや弱さ、あるいは手放したくない生き方に触れようとするとき、私たちは無意識に、神との間に距離を取ろうとしてしまいます。聖書はそのように神との関係に距離が生まれてしまっている状態を繰り返し“罪”と呼ぶのです。

悪霊は、時が来れば、自らが裁かれ滅ぼされることを知っています。しかし彼らは、「まだ、その時ではない」と考えていたのでしょう。ところが、目の前に「神の子」が立たれた。それは悪霊にとって神の支配がすでに始まっているという現実を突きつけられた出来事です。神の子の到来は救いの始まりです。しかし、悪霊にとっては裁きの始まりでした。悪霊はキリストに「我々を追い出すのなら、あの豚の中にやってくれ」と願います。「豚」はユダヤ人にとって穢れた動物として、食べることはもちろん、飼うことさえ避けられていました。悪霊たちは豚の中なら神の支配が及び難い、自分たちの居場所が確保できると考えたのでしょう。しかし、その願いは、結果として裏目に出ることになります。「イエスが、“行け”と言われると、悪霊どもは二人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れはみな崖を下って湖にだれ込み、水の中で死んだ。」とある通りです。

キリストは悪霊の力を無力化し、その行き着く先が滅びであることを誰の目にも明らかにされました。悪霊は人を縛り、支配し、人を「墓場」に住まわせてきました。しかし、人をいとも簡単に支配する悪霊の力も神の子キリストの前では無力なのです。キリストは悪霊に勝利する圧倒的な力を持っている神の子なのです。

私たちの人生にも、時に思いがけず悪霊と出会うような出来事が起こり

ます。あるいは知らぬ間に悪魔の誘惑に心を向け、その結果、悪霊に入り込まれてしまうということがあります。けれども、私たちが悪霊と出会うその時、私たちは決して一人ではありません。主と共に居てくださるので、イエス・キリストご自身が私たちと共にその現実に立ち合い、突然の出来事と混乱の中に、自ら身を置いてくださるのです。そして最後に支配されるのは悪霊ではなく必ずキリストです。

悪霊は叫び、願い、必死に居場所を求めました。しかし、行き着いた先は滅びでした。この姿は人を神から遠ざける力がどこへ向かっていくのかをはっきりと示しています。私たちがまた、人生の歩みの中で知らず、知らずのうちに心を縛って来たものがあるのではないのでしょうか。過去の失敗、消えない後悔、失ったものへの思い、“もう、仕方がない、今更変わらない”という諦めの言葉、それらは何時の間にか私たちが動けなくし、生きる力を奪っていきます。しかし、今日の御言葉ははっきりと告げています。“神の子が来られるところに人を縛り続ける力は、もはや、止まることができない。”キリストは、私たちが滅びへと向かわせる力から解き放つために来られた方です。

悪霊は目の前に立たれた方が神の子であることを知っています。ところが人間はまだそのことが分かりません。目の前で起こった出来事を見ながらも、それが何を意味しているのかを受け止め切れなかったのです。そのために、今日の箇所の結びで、ガダラの人たちはキリストに、“この町から立ち去って欲しい”と願いました。それはキリストを拒んだというよりも、キリストの存在がもたらす変化を受け止め切れなかったということなのかもしれません。神の子がそこに立たれる時、これまで大切にしてきた秩序や安心、慣れ親しんだ生き方が揺さぶられるからです。彼らはイエスを見た、イエスの力を知った、奇跡の結果を目のあたりでした、それでも従うことができませんでした。悪霊に出て行ってもらいたいと願ったのではなく、神の子に出て行ってもらいたいと願ったのです。

この時のガダラの人たちの姿は、知っていることと信じて従うことの違いを私たちに深く考えさせます。従うとは人生の主導権を主に明け渡すことです。ガダラの人々は救いよりも安心を、解放よりも現状維持を、主の支配よりも自分たちの秩序を選びました。この姿は決してガダラの人たちだけの話ではありません。私たちがまた、救いの力に触れながら、“今のままでいたい”とキリストから距離を取ろうとすることがあるのではないのでしょうか。この物語は、そのような私たちの姿をも映し出しています。悪霊は私たちに、“このままで良い、変わらなくても構わない”と囁きます。そうして私たちの歩みを止め、神へ向かう一歩を踏み出せないのです。ガダラの人々が解放よりも現状を選び、“キリストに立ち去って欲しい”と願ったように、救いそのものを煩わしいもの、関わり合いたくないものと感じさせてしまう、それもまた、人を神から遠ざける力の確かな働きであります。

悪霊の働きは今もお続いています。滅ぼされ、追い払われても、悪霊は人を捉え、支配しようとします。神に従う事を拒み、自己中心に生きようとする心、自分は悪くない、問題はあの人にあると責任を外へ追い出してしまおうとする心、そのような心こそが悪霊にとってもっとも住みやすい場所となるのです。自分を“正しい者だ”と言い続ける限り、悪霊はそこを足掛りとして入り込んで来ます。私たちが本当の解放よりもキリストに立ち去っていただくことを選び、慣れ親しんだ現状にしがみついてはいないのでしょうか。

豚飼いたちは手塩にかけて育ててきた豚の群れが目の前で失われていく光景を見ました。彼らの目に映ったのは失われた所有物でした。そのためキリストを救い主としてではなく、自分たちの財産を奪う恐ろしい存在として見てしまったのでしょう。悪霊の働きはキリストから一人でも多くの人間を引き離すことです。自分たちと同じ滅びの道へ人を道連れにすることにあります。

悪霊にとって人間は弱く未熟な存在です。それにも拘らず、神は人を愛し、共に生きる者として選び、命を与えられている、その事実がどうしても受け入れることができないのです。そのために、悪霊は人間に対していつも激しい嫉妬、妬みを燃やしながらかから遠ざけようとするのです。

今日は福音書と共にサムエル記が読まれました。ここに描かれているのはイスラエルで最初の王となったサウルの心に芽生えたダビデに対する妬みの思いです。「自分はこれほどしているのに、なぜあの人が評価されるのか」、そのような思いを一度も懐いたことのない人はいないのではないのでしょうか。

9節に「この日以来、サウルはダビデをねたみの目で見るようになった。」とあります。ここで用いられている「ねたみの目」というのは、現実を在りのままではなく、歪めて見てしまう状態を指します。例えるなら、罪のない者をまるで罪人であるかのように見る、それが「ねたみの目」です。

聖書はこの「ねたみの心」こそが、人間の内側に隙間を生み出すものだと言います。その隙間に悪しき力が入り込み、人を神から引き離し、人を人からも引き離していきます。そのような心の隙間を、人を滅びへ向かわせる力は決して見逃しません。だからこそ、聖書は「ねたみ」を軽く扱わないのです。「ねたみ」は、私たちのうちで神ではなく、自分が中心になり始めていることを示す危険なサインであるからです。しかし同時に聖書は、この「ねたみ」の心にさえ、神の救いが向けられている事を告げています。キリストに出会い、福音を聞いた私たちは、ここで一度立ち止まり、立ち返るように招かれています。どこに立ち返るのでしょうか。聖書は私たちが神によって生かされているのか、それとも別のものに頼って生きているのかと、その事を問うのです。神から離れて生きようとする事、そのことにこそ罪の本質があります。使徒パウロが語ったように、信仰に基づかない生き方は、どれほど立派に見えても神の命と結ばれていないという意味での外れなのです。私たちは自分の力で生きようとするのではなく、神と結ばれて生きる、その信仰によって生きるのです。そこに立ち返るとき、私たちは初めて、人として本来与えられている命の道を歩み始めることができます。

私たちの生きる世界には理屈や理論だけでは説明しきれない苦しみ、分断、破壊、深い孤立が確かに存在しています。聖書はその現実から目をそらしません。悪霊は確かに今もなお、この世界において働いている存在として語られています。私たちの前にも理解しきれない出来事があります。近づきたくない現実、できれば避けて通りたい恐れや不安があります。しかし聖書は悪霊を追い払い、人を再び神との交わりへと回復させる力をキリストだけが持っておられると告げています。

主はすでにここに立たれておられます。私たちはその主の後ろに連なって歩む者とされているのです。主の恵みと召しを受けた私たちは主と共に歩み行きましょう。お祈り致します。

聖なる神、礼拝の恵みを与えてくださったことを心から感謝致します。

主よ、私たちは時に、誘惑の言葉に心を奪われ、あなたから距離を取って歩んでしまう者たちであります。それでもなお、あなたは私たちを見捨てることなく、御子イエス・キリストを遣わし、その御言葉によって滅びへの力を退け、私たちが命の場所へと連れ戻してくださいました。どうか、私たちを、あなたの後ろを歩む者としてください。恐れの中にあっても、混乱の只中にあっても、既に勝利しておられる主に信頼し、御言葉に従って歩み続ける者となれますように。主の聖名よって祈ります。アーメン。

讃美歌:536「み恵み受けた今は」

聖晚餐 使徒信条の告白 和解の挨拶

讃美歌:78「わが主よ、ここに集い」

献金・感謝(高橋智津子)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

恵みと慈しみに富む主なる神さま。今日も私たち一人ひとりに、御言葉と主の食卓の恵みを与えてくださいましたことを心から感謝致します。語りかけてくださいました御言葉はいのちのことばでありました。心に刻み付けていきますように祈ります。パンと杯の恵みを通して心と体を養ってください、私たちが一つとなり、永遠の命を知ることができました。

今、献げました物は、あなたから頂いた恵みへの感謝の徴です。御用のために用いてくださいますように祈ります。

あなたが教えてくださいました「主の祈り」を共に祈り、これから始まる一週間の日々をお守り導いてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌 88「心に愛を」

派遣と祝福 司式:主は言われます。「私は誰を遣わすべからず。 会衆:私がここにおります。私を、お遣わし下さい。司式:「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。>

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告: 諸教会連帯委員会:中標津教会取扱いチーズが生産中止となり、この形での支援ができなくなる事。但し、在庫があるので2月一杯、取扱いが出来る事のこと、中標津チーズ申込用紙をテーブルの上に置きました。この形での最後の支援となりますのでご協力ください。

後奏:「神をほめ、祝しまつらん」(M.ヴェックマン)